9-3. 支部表彰

全日本豚共進会出品豚の成績優秀な支部ならびに依託団体を表彰するもので，出品頭数の多少による組別の中での団体総合成績により表彰する制度である。

第 9 回共進会の規程を例にとってみるとその要領は次のとおりである。

① 第 1 部より第 5 部（第 5 部親子群は 1 組を 1 頭とみなす）を通じ，出品頭数により各支部を第 1 組（出品豚 13 頭以上），第 2 組（出品豚 7 頭以上 12 頭まで），第 3 組（出品豚 5 頭以上 6 頭まで），第 4 組（出品豚 3 頭以上 4 頭まで），第 5 組（出品豚 2 頭以下）に区分し，毎組毎に成績をとり，第 1 組は 2 位，第 2 組は 3 位，第 3 組は 4 位，第 4 組は 3 位，第 5 組は 4 位までを表彰する。

② 出品豚の等級により次の得点を与える。名誉賞 8 点，金賞 6 点，銀賞 4 点，銅賞 2 点。

③ 各支部の成績は，全出品豚の総合得点を出品頭数で除した得点により，これを決定する。

④ 前条の得点が同一の場合は，次の基準により順位を決定する。イ）銀賞以上に入賞した頭数の多いものを上位とする。これにより決定し難い場合は，最上位入賞豚の等級および席順によって決定し，席順が同一の場合は出品頭数の多い類に属するものを上位とする。

ロ）前項によりなお決定しない場合は，会長がこれを決定する。

初期（第 3 回，第 4 回）と後期（第 9 回，第 10 回）の成績を摘録すると表 11.9 のようであった。

表 11. 9　支部表彰

回　次	組　別	第 1 位	第 2 位	第 3 位	第 4 位
第 3 回	第 1 組	静岡県支部	千葉県支部	鹿児島県支部	
	第 2 組	富山県支部	新潟県支部	長野県支部	
	第 3 組	岐阜県支部	山口県支部	滋賀県支部	
第 4 回	第 1 組	神奈川県支部	群馬県支部	鹿児島県支部	
	第 2 組	青森県支部	岩手県支部	宮崎県支部	
	第 3 組	福島県支部	山口県支部	島根県支部	
第 9 回	第 1 組	茨城県畜産会	静岡県支部		
	第 2 組	熊本県支部	愛知県支部	神奈川県家畜改良協会	
	第 3 組	長崎県支部	岐阜県畜産会	岩手県支部	鳥取県支部
	第 4 組	三重県支部	山梨県支部	青森県支部	
	第 5 組	大分県支部	佐賀県支部	福島県支部	兵庫県支部
第 10 回	第 1 組	群馬県支部	茨城県畜産会		
	第 2 組	熊本県支部	鹿児島県支部	宮崎県支部	
	第 3 組	長崎県支部	福島県支部	栃木県家畜改良協会	
	第 4 組	福岡県支部	山梨県支部	東京都支部	鳥取県支部
	第 5 組	大分県支部	香川県支部		兵庫県支部
			佐賀県支部		鳥取県支部

9-4. 出品者表彰

第 7 回および第 10 回共進会において出品者表彰を受けた方々は次のとおりであった（敬称略）。

（最多出品者）

保坂治男（栃木県），斎藤愛作，吉野　稔，矢部卯三郎（以上埼玉県），向　正太郎（石川県），加納源太郎（岐阜県），望月半蔵（静岡県）

（連続 5 回出品者）

岡本　茂（北海道），水上洋一（岩手県），榎戸武雄（東京都），（株）福野養豚センター（富山県），立花貞雄（大分県）

（5 回出品者）

佐藤光治（秋田県），大久保泰次（神奈川県），森　繁雄（鹿児島県），染谷　豊（茨城県），竹川久雄（兵庫県）。

10. 審査余聞

過去 10 回の共進会審査には沢山の苦心談やエピソードがあるが，そのいくつかを簡単に披露させていただく。

1）審査委員としては，与えられた時間内に出品豚を厳密・入念に審査し，かりにも見落とすところがあっては出品豚や出品者に相済まぬ。しかし，出品頭数が 300〜370 頭にもなると，1 頭の出品豚に平均して割当てられる審査時間にも自ら限度があるので，最初の個体審査から最終の比較審査までに同一豚が審査場に入場してくる回数は多いもので 4〜5 回ぐらい（展示講評を含めても 5〜6 回ぐらい），少ないものでは 3〜4 回ぐらいであるから，審査はこの限られた時間内に全精力を傾注して行わなければならない。従って出品豚が審査場に入場してきた瞬間から審査場を退場する間際まで全く眼を離す余裕はない。その間に審査の成績，個体の特徴などを審査簿に記入しなければならない。早朝から日没までの連続審査はかなりの重労働であるが，審査中は無我夢中で疲れを感ずる余裕などは全くなかった。

2）第 1 回共進会では既述のように肉豚の審査に未だわが国の肉豚審査標準というものがなく，やむを得ず田口教一会長の提唱により専門委員が集合して「肉豚審査要綱」をつくり（既述），これによって肉豚の審査を行うこととなった。そして審査委員には大学や試験場等の学識経験者（仮りに A グループと記す）と，食肉市場で多年実際に豚肉の商取引に関係しておられる専門家（仮りに B グループと記す）が委嘱された。A グループからの審査委員には木塚静雄氏（山口大教授）と石井　徹氏（農林省畜試技官）が，B グループからの審査委員には松井鹿之助氏（東京食肉卸協同組合理事長）と，中島　実氏（東京都衛生局公衆衛生課技師）が委嘱さ

れた。この A，B グループ審査委員の審査結果がうまく一致するだろうか，初めてのことなので審査委員長の佐々木清綱先生も大分心配しておられたが審査結果はほとんど一致して問題はなかった。しかし，A グループの審査委員は「肉豚審査要綱」に従って克明に審査簿に各項目毎の得点，特徴を記入されていたが，B グループの特に松井審査委員は一々審査簿の各項目に記入されてはいなかったが，審査委員会議の席上では，最上位の枝肉は第〇号，次に優秀なのは第〇号，次は第〇号と 10 位ぐらいまでの序列をすらすらと発表され，しかもそれら各枝肉の長所，欠点を空で，的確に発言されたのには驚いた。そして最終的に審査結果は A グループのものとほとんど一致した。毎日多数の枝肉を商取引の現場において真剣に観察評価されている，いわゆる肉の玄人（くろうと）の方々の鑑識眼の鋭さには感心した次第であった。

3）第 1 回共進会後，（社）日本種豚登録協会ではこの「肉豚審査要綱」を土台として「肉豚審査標準（生体審査標準とと体審査標準）」を策定し，第 2 回共進会以降はこの標準によって審査を行い，審査委員も A グループと B グループから選ばれていたが意見の食い違いはなく順調に行われた。

この「肉豚審査標準」のと体審査標準がやがて（社）日本食肉協議会の「豚枝肉格付規格」の設定に重要な役割を果し，次いで現在の（社）日本食肉格付協会の「豚枝肉格付規格」の基礎資料となった。現行の「豚枝肉格付規格」の当初の解説書に「豚枝肉格付規格」の策定にあたっては「商取引の現状を重視する」旨の方針が述べられているが，このことは既に第 1 回共進会の肉豚審査委員の中に上記 B グループの審査委員が参画しておられ，第 2 回～第 6 回共進会の肉豚（枝肉）審査にも B グループに属する審査委員が加わっておられて何らの齟齬もなかったことから，商取引の現状は十分とり入れられていると思われた。

4）種豚の審査にあたって審査委員長の佐々木清綱先生は，当時注目されていた家畜の正常体型（ノルム）を実証するため東大畜産学教室から正田陽一先生（当時助手，現東京大学名誉教授）をはじめ教室の学生さんをつれてこられて体尺測定値を整理・計算させ（当時は手廻しの計算機しかなかった），審査報告の参考とされていたが，正常体型の数値が審査結果とよく一致していたのでご満悦のようであった。

5）審査結果の打合せや等級決定は深夜に及ぶこともしばしばであった。伊藤祐之審査委員長のとき，審査委員室でローソクを灯して夜中まで慎重審議したことは長く記憶に残る出来事であった。審査報告の原稿〆切は，翌日配布する授賞目録の印刷原稿を使者が夜中に東京の印刷所まで持って行く関係上，待ったなしの時間厳守で実にきびしいものであった。

6）種雄豚の出品条件に，未だ産子のない種雄豚には家畜保健衛生所長または家畜人工授精所長の発行する「精液検査証明書」を添付させることを佐々木先生とご相談の上決定したことは 1 つの進歩であった。種雄豚の体型がいかに優秀であっても生殖能力に欠陥があっては問題に

ならない。これは他の家畜でもその方向で検討されていると思う。

7）種豚の審査場における豚の誘導技術は出品者（管理者）の平素の種豚の運動，調教の状態を正直に反映するものである。最初のうちは良いが，大切な最終比較審査の段階になってくると背がたるんだり，肢蹄の弱い欠点が目立ってくる。審査場での豚の誘導技術は，共進会の回を重ねる毎に上手になり，第 4〜5 回頃からは審査に難渋するような例はほとんどなくなった。中でも鹿児島県の森　繁雄氏，森　勇蔵氏らの豚（バークシャー種）の誘導技術はすばらしいものであった。竹の鞭 1 本で豚を思う方向に歩かせたり，停止させたり，正姿勢をとらせたり正に人豚一体の至芸であった。

8）一度どこかで見たことのある豚は審査の時に直感で分るものである。第 1 回共進会の折，兵庫県の出品豚（T 氏が追っておられた中ヨークシャー種の雌豚）にどこか見覚えがあったので「この豚はどこかで見たことがある豚ですね。たしか去年秋の近畿 2 府 5 県連合畜産共進会に出品されていた豚ではないですか」とたずねたら，T 氏は驚いて「そうです，審査委員の眼は「いかさま」ではありませんね」（節穴ではないという意味か）と言って恐縮，苦笑されたことが記憶に残っている。

9）白色種（中ヨークシャー，ランドレース，大ヨークシャー）の顔面や尾のつけ根，稀に軀体の一部に出る小黒斑，黒点をかくすために，「とのこ」で消したり，白粉（おしろい）を塗ったり，又被毛のつやを良くするために人化粧用のクリームをつけたりして出てくる豚は，近づいてよく見たり，手で触ってみると分かるし，審査場に時ならぬ芳香をただよわせることがある。出品豚の晴れ姿を少しでもよくしようとの出品者の心情はよくわかる。第 5〜6 回以後の共進会では小黒斑（黒点）はあまり重視しないようになったし，そのように細工した豚は滅多に出てこなくなったように思う。

10）共進会で優秀な成績を得た種豚はいつまでも記憶に残っているので，あとでその地方に出かけた機会には時間の許す限り，出品された養豚家を訪ねて，かつての出品豚を見せて頂き，その後の成績を聞かせて頂くことを楽しみにしていた。「この雌豚は実によく働いてくれましたよ。10 産以上も分娩し，良い子豚を沢山生産・育成してくれ，まだこのとおり体もしっかりしていて健在です」と言われればこの上なく嬉しい。いっぽう，種雄豚で見る影もなく痩せ衰え，体型も崩れてしまっているものや，甚だしい場合は「残念ながら死亡しました」と聞かされるとがっかりする。共進会終了後，上位入賞の種雄豚はあちこちから精液の分譲や種付の希望が殺到するので，無理とは思いながらもついつい供用過度となって衰弱させたり，早死させている例が多い。優秀な種豚の有効利用のためにもその後の適切な飼養管理が望ましい。

11）こんなすばらしい豚はもう二度と現われてこないのではないか，と思われるような立派な種豚の姿は何年経ってもわれわれの脳裡に深く刻み込まれていて永久に忘れ難いものである。

現在であれば，豚精液の凍結保存技術も完成しているし，受精卵（胚）移植の技術もかなり進歩して実用化の域に達しているので，貴重な遺伝子資源の永久保存もできたであろうに実に惜しかったなあと回想される昨今である。

11. 豚共進会と高松宮殿下

故高松宮宣仁親王殿下は，養豚界では「豚の宮様」として尊敬されていた。

高松宮殿下には第 1 回から第 10 回まで（第 6 回の肉豚共と第 9 回は公務ご多忙のためご欠席）この全日本共進会にご来場になり，出品豚の収容されている各県の豚舎をお廻りになって出品者 1 人 1 人に親しくねぎらいのお言葉をかけられた。出品者はもちろん養豚関係者は毎回感激して共進会で殿下にお目にかかれることを光栄とし，お待ち申し上げていた。高松宮殿下と豚共進会にまつわる思い出のうち，印象の深い 2，3 を記録しておく。1）佐々木清綱先生が審査委員長であられたとき，農林省畜産試験場から参考豚として「いのしし，いのぶた（いのししと中ヨークシャーの雑種），中国豚（民豚）」を出品していた関係で，田口会長，佐々木先生に随行して場内を廻ったとき，殿下から「今回の出品豚には中ヨークシャー（Y 種）とバークシャー（B 種）の 2 種類しかいないが，日本の豚の品種はこの 2 種類でよいのですか」とのご下問があり，佐々木先生は「わが国の養豚の規模や豚舎の大きさ，豚肉の用途などからみて現在はこれでよろしいのですが，将来は新しい品種も必要になるかも知れません」とお答えになられていた。昭和 35 年頃から L 種が，ついで W 種，H 種，D 種が輸入され，この共進会にも第 5 回以後新しい品種が出品されるに至ったが，殿下はどのようにお感じになられていたでしょうか。

図 11. 17　豚舎をお廻りになって親しく出品者をねぎらわれる高松宮殿下

2）第 8 回共進会は雄大な富士山麓の静岡県御殿場市滝ヶ原高原の会場で開催され，このときは高松宮・同妃両殿下お揃いでご臨席になり，主催者，出品者はじめ関係者の喜びはまた一入であった。

その折，筆者はテント張りのご休憩所で，出品豚の生体測定に新しく採用した超音波測定器（スキャニングスコープ，スキャナー）による豚の背脂肪の厚さとロース断面積の測定法についてご説明申し上げ，実物（豚）について測定の実演をご覧に入れましたところ，両殿下には大変ご興味を示され「豚の審査も大分科学的になりましたね」と感心され，「人間でもできますか」などいろいろご質問があり，お笑いになられていたことを思い出します。

3）殿下をお迎えしての昼食会が開催された折，三宅会長はじめ協賛会長の県知事さんなど関係者がご出席になり，筆者も末席に連なる光栄に浴しましたが，殿下は「豚の共進会だから，もっと豚肉や豚肉製品が多いといいね」など仰っしゃりながら，ざっくばらんにいろいろなお話をなされたが，殿下の養豚に関するご造詣の深さには感銘を受けました。

高松宮殿下のおことば（昭和 47 年，1972 年，3 月）「第 7 回の全日本豚共進会の開催に当りまして，全国の養豚家を代表される皆様，またこの上なく豚を可愛がっておられる皆様方の元気なお姿に接しまして，私，誠に喜びにたえないのでございます。かえりみますと，この第 1 回の共進会が三島市で開催されましてから，早くも 20 年を経たということでございます。私，第 1 回以来たびたび皆さんの種豚を見てきまして，その間に回を重ねるごとに，改良進歩の跡が著しいというお話を伺って，この会がわが国の養豚事業の発展に大きく貢献していることに対しまして，深く敬意を表わしたいと思うのであります。

われわれの共同社会の食生活の習慣も，年とともに移り変りがございまして，豚肉の需要は将来ますます増加すること間違いないと思います。その反面，養豚経営にも新しい公害問題とか経費節約となるいろいろな問題も多いことと思いますが，国民の栄養を良くし体位の向上

図 11. 18　ご休憩所で筆者からスキャナー（右下の機械）についての説明を聴取される高松宮両殿下

と，また農業経営の安定のために，いろいろと研究工夫を重ねられ，その間，一時的な困難は乗り越えて種豚の改良や増殖に成果をあげられますようにお祈りしまして，挨拶といたします」。

高松宮杯のご下賜と受賞者

昭和 39 年 9 月，(社)日本種豚登録協会三宅三郎会長は高松宮家を訪問され，殿下にご面接のうえ，ご来場（第 5 回共進会）についての日程のお打合せを行ない，また高松宮杯のご下賜をお願いしてご承諾を得られ，同年 10 月，登録協会に「高松宮杯授与規程」をつくって宮杯の授与が正式となった。高松宮杯は全日本豚共進会において，種豚，肉豚を通じて最優秀なものに授与される出品者にとって最も栄誉ある名誉賞である。授与開始以来第 10 回までの高松宮杯受賞者は表 11.10 のとおりである。

高松宮殿下には昭和 62 年 2 月 3 日，82 才でご逝去遊ばされたが「豚の宮様」として養豚関係者敬仰の的であった。殿下の思い出は，養豚関係者の胸の中に末永く記憶に残ることであろう。謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第です。

表 11. 10　高松宮杯受賞者一覧（敬称略）

回　次	品種	部・類	受賞豚	受賞者県・氏名
第 5 回	Y	第 1 部種豚第 2 類（雌）	89 号豚	群　馬　高橋　四郎
第 6 回（種豚）	L	第 3 部第 2 類（経産）	180 号豚	神奈川　二見　一雄
第 7 回	L	第 3 部第 4 類（壮齢雄）	169 号豚	秋　田　佐藤　　功
第 8 回	W	第 5 部親子群	第 19 組	静　岡　小松　　薫
第 9 回	L	第 5 部親子群	第　4 組	茨　城　染谷　　豊
第 10 回	W	第 2 区親子群	第 29 組	群　馬　吉田小夜子

図 11. 19　高松宮杯の授与
（受賞者　第 10 回，吉田小夜子さん，群馬県）

12. 共進会の模様と附帯行事

12-1. 儀　式

共進会の儀式は毎回大体同様の形式で挙行されたので，第 9，10 回の例を記録しておく。

1）開会式次第

1. 出品者，出品委員集合　2. 全員整列　3. 国歌演奏（国旗掲揚）　4. 開会のことば　5. 会長挨拶　6. 高松宮杯返還　7. 審査委員長挨拶　8. 審査委員紹介　9. 出品者代表宣誓　10. 来賓祝辞（祝電披露）11. 閉会のことば

2）　褒賞授与式次第

1. 出品者，出品委員集合　2. 全員整列　3. 国歌演奏　4. 開会のことば 5. 会長挨拶　6. 審査報告　7. 褒賞授与　8. 団体表彰　9. 連続出品者表彰　10. 感謝状贈呈　11. 養豚功労者表彰　12. 祝辞（祝電披露）　13. 受賞者代表答辞　14. 養豚功労者代表謝辞　15. 高松宮杯授与　殿下会場ご退場　16. 閉会のことば

褒賞については，最高位の名誉賞に高松宮杯をはじめ，名誉賞，優等賞に全日本豚共進会会長の賞状・賞品と優勝旗，内閣総理大臣賞，農林大臣賞，農林省畜産局長賞，県知事賞，市長賞その他各種団体の会長賞のほか，国外から英国種豚生産者協会，ドイツ種豚登録協会，デンマーク種豚生産者協会，オランダ大使館，COVECO，アメリカヨークシャー，ハンプシャー，バークシャー，デュロック，ランドレース各種豚協会，カナダアルバータ州種豚協会等から副賞が寄贈された。

12-2. 景　況

4 年に一度の豚のオリンピックとも言うべき祭典は，第 1 回以来第 10 回まできわめて盛況裡に行われた。北は北海道から南は沖縄に至る会期中の参観者は毎回 10～20 万人と記録されており，開催地や近県はもちろん遠く全国各地からバスを連ねての人出で賑わった。豚は汚いものとの誤ったイメージを持っておられた市民（消費者）の多くは目前の美しくすばらしい豚を

図 11. 20　共進会の儀式（田口会長の式辞，中央は佐々木清綱審査委員長）

見て驚き，今までの誤った認識を大いに改めた様子であった。農家の方々はもちろん，幼稚園，小，中，高校生の見学を兼ねての入場者も多く，また第 7 回以降は外国人（ヨーロッパ，アメリカ，カナダ，アジア諸国など）の参観者も増え，国際色豊かな豚共進会となった。

会場では開会前日の前夜祭から，全国各地の郷土芸能の披露，特産品コーナー，養豚便り（現「日本の養豚」誌）愛読者大会，植木市，養豚関係器具機材の展示等々が行われ，賑やかな雰囲気で盛り上がった。

なお，褒賞授与式の前に毎回，主任審査委員から審査場で上位入賞豚について展示講評が行なわれたが，この時の会場内の緊張感と，審査場を歩く優秀豚の晴れ姿，受賞者の喜びに満ちた表情は最高のものであった。

12-3. 附帯行事

附帯行事としては，養豚に関する普及展示（パネル），豚枝肉の展示，全国養豚大会並びに講演会，指定種豚場研修大会，養豚功労者表彰，入賞予想投票，高等学校生徒種豚審査競技会などが行われた。

高等学校生徒種豚審査競技会は，第 4 回共進会以降適当な時間に場内審査場で行われた。この競技会の参加範囲は，日本学校農業クラブ連盟に加盟している地域ブロック内の学校で出場選手は 1 校 2 名であった。競技は種豚 5 頭の種雌豚について比較審査を行ない，優秀なものから順位をつけるやり方で，審査時間は 30 分，審査委員長には北本弥三郎先生（副会長）が当たられた。第 7 回の場合，出場校は茨城県 11 校，静岡県 3 校，千葉県 2 校，栃木，群馬，埼玉各 1 校，計 19 校，出場選手計 38 名であった。審査競技はきわめて熱心かつ真剣な態度で行われ，審査講評ののち，9 名の選手に優秀賞が贈られた。

13. 諸外国の共進会との比較

筆者が見学したことのある諸外国の畜産とくに豚の共進会は，イギリス，アメリカ，台湾などである。

13-1. イギリス

英国では，世界的に有名なロイヤル・ショウ　Royal Agricultural　Show，ピーターボロー　Peter borough での生豚共進会，屠体共進会などを見学した。

1）ロイヤル・ショウは毎年英国中部の常設会場で開催され，さすが世界一の種畜国といわれる国の大共進会だけあって世界各国から見学者やバイヤーなどが集って盛会である。出品される家畜は，乳牛，肉牛，めん羊，山羊，豚などほとんどの家畜の各品種で，出品者は自分の飼育する種畜をこの共進会に出陳することにおおきな喜びを持っている。それがたとえ少数の希少品種であっても畜主は堂々と胸を張って自らが愛育し，祖先から受け継いだ種畜と共に会場を

図 11. 21　ロイヤル・ショウの入口にて
右　　故上坂章次先生
（当時京都大学教授）
中央　案内して下さった英国人夫婦
左　　筆者

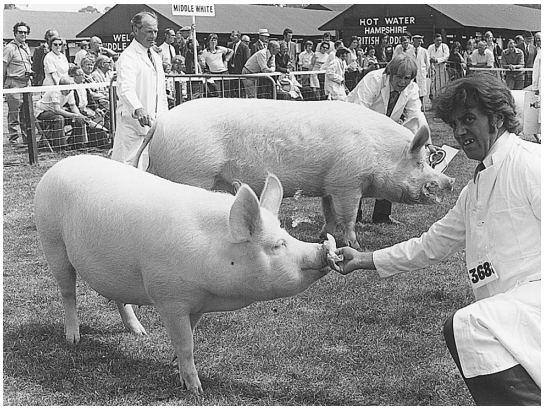

図 11. 22　ロイヤル・ショウでの出品豚　大ヨークシャー種

歩くことに誇りを持っていると言われ，種畜国としての傳統は磐石と思われた。

豚は大ヨークシャー（W 種）が中心のようであったが，他の品種も出品され，W 種はさすがにイギリス大ヨークシャー　Large White の典型的な体型を示す立派な見応えのあるものが多かった。

このロイヤル・ショウには連日英王室からどなたかがご来場になって，親しく種畜をご覧になると同時に畜産農家をお励ましになり，最優秀の種畜（グランド・チャンピオン）に女王からロイヤル・カップを授与される光景は誠にほほえましく感動の一瞬である。

2）ピーターボローでの豚共進会（W 種）でも優秀なものが多かった。興味ある趣向として，審査場中央に吊した縦長の黒板に出品豚の番号を書いた札がかかっており，今，何番の豚を上位に見ているのかが参観者にも分かるようになっており，審査の進行に伴ってその番号が入れ替る。出品者は白衣を着て，細長い白塗りの板（幅 5 cm 位）で豚を追う。審査員は背広服姿で，日本とは逆である。他の州の共進会も大体同様とのことであった。

試みに，何頭かの豚についてこの豚で何点ぐらいをつけているのか審査員に聞いてみたが，審査得点はわれわれとあまり違わなかった。部位別には，乳頭の数や質（盲乳頭，副乳頭など）の付点（減率）は日本ほど厳格でない印象であった。

3）ピーターボローでの屠体共進会は，半丸ベーコン用屠体の比較共進会で，各部の測定値や品質の得点が実物に示してあるので，専門家はもとより一般見学者にもその良否が分り，啓蒙的効果は大きいものと思われた。筆者は出品（陳列）されていた屠体 120 頭全部について実物と説明・点数をつき合わせながら 1 日詳しく見学し，大変よい勉強になった。ちなみに，審査得

図 11. 23　英国のロイヤル・ショウで種豚をご覧になるエリザベス女王陛下

点の最低は 47.5 点，最高は 87 点で，かなりはっきりと差がつけられていた。

13-2. アメリカ

米国での豚共進会の代表的なものはバローショウと各州で開催されるステート・フェアであろう。

1）バローショウ National Barrow Show はミネソタ州 Austin で毎年 9 月中旬に開催される。全米各州はもちろんカナダの養豚家も参加する。出品品種はハンプシャー，チェスターホワイト，デュロック，スポット，タムウォース，ポーランドチャイナ，バークシャー，大ヨーク

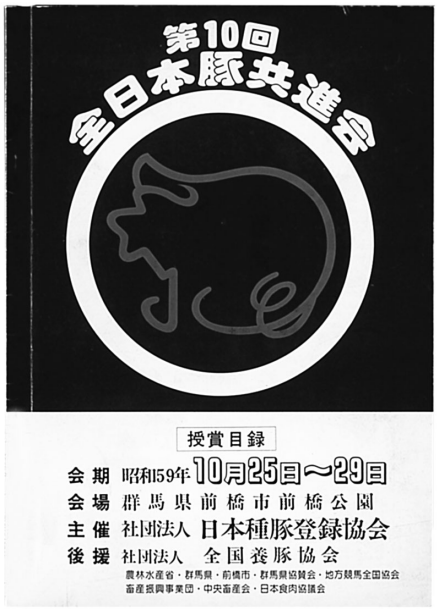

図 11. 24　第 10 回全日本豚共進会の授賞目録

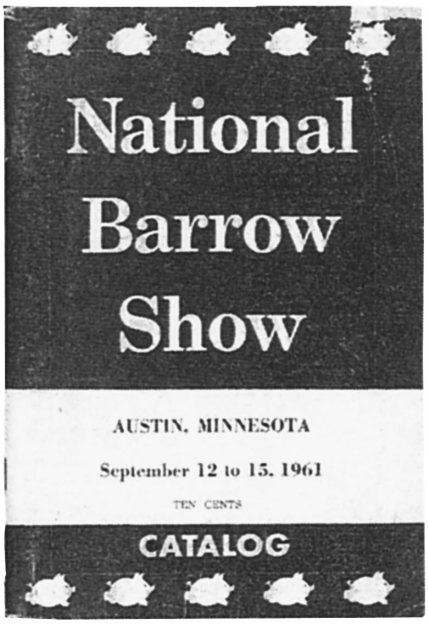

図 11. 25　米国バローショウのカタログ

シャー，ランドレース等の各純粋種と雑種で，審査終了後，入賞した純粋種の若雄豚と雌豚（未経産）のセリ市が行われる。種豚の審査は，数頭づつを審査場に入れて比較しながら個体審査を行ない，良いものだけを柵内に残して次のグループを入れるというやり方で，審査時間が短いので豚体にふれて細かい点を見るなどという余裕はあまりなかったように思う。また出品豚の誘導はアメリカではステッキで，英国（白塗りの細長い板）や日本（竹のむち）とは違うのもお国柄である。審査員は 1 会場 1〜2 名で，審査後に審査員がマイクで実物について審査講評を行なう。審査終了後に，審査場をせり市場に模様替えしてセリが行なわれているが，各国のバイヤーが多数訪れて盛況である。

2）ステート・フェア　State　Fair　は，米国各州やカナダで行なわれており，常設の立派な建物を会場とし，恒例行事として盛大に開催されている。この建物は主に畜産共進会に用いられているが，他の時季にはいろいろの農業関係の催しや各種の show などに使用されている。筆者はミネソタ大学滞在中に上記のバローショウやミネソタ州，オハイオ州のステート・フェアなどには何回か出かける機会があったが，ステート・フェアには各家畜が出陳されており，優勝を競うというのではなく畜産農家が自慢の家畜を出陳してお互いに交流するという和やかさがある。豚は各品種のものが出陳されており，学ぶところが多かった。

13-3. 台湾

アジアでは，台湾（台南市で開催）の豚共進会も見せていただいたが，なかなか熱心で，立派な共進会であった。

以上のように，各国とも毎年盛大に家畜の共進会が行われており，家畜（豚）の審査，優秀な家畜の褒賞と展示，家畜とのふれ合い，畜産農家の親睦，交流などよく共進会の目的を果して効果をあげている。わが国の家畜共進会も常設の全国的な共進会場はないが，過去 10 回の全日本豚共進会でみる限り，豚共進会としての規模，開催要領，運営の仕方など大変立派で，きめ細かな配慮がなされており，決して諸外国に劣らないことを確信している。

14. 外国人参観者の見た日本の豚と豚共進会

この全日本豚共進会は毎回全国各地からの参観者で連日賑わったが，第 6 回種豚共進会以降は諸外国からの視察国もふえ国際色豊かとなった。外国人参観者の見た日本の豚と共進会の所感の一部を紹介すると次のようであった。

1）第 7 回共進会（茨城県那珂町）には，英国から F.G.B. バーリング氏（ブリティッシュ・ライブストック・カンパニー取締役），オランダから Ir. Y. クロー氏（登録協会），H.G. ヤンセン氏（オランダ家畜市場協同組合部長），A. ド．ブルー氏（同部長），米国からボブ・ハインズ氏（ミズーリ州，ハインズファームス代表）その他が来日され，終始きわめて熱心に出品豚の体型，

資質や審査の結果を注視されていたが，審査の合間に出品豚についての印象を聞いてみたところ，オランダの人達は「ランドレースの経産豚についてはオランダのトップレベルと同じだ。しかし大ヨークシャーについてはわれわれの方が上だ」という。（筆者註：ランドレースは第 5 回共進会から登場しているが，大ヨークシャーについては輸入後，日が浅く，今回（第 7 回）が初めての出品であった関係もあると思われる）。

英国のバーリング氏は「日本の豚の改良が進んでいるのには驚いた。また共進会の規模，熱心さも大したものだ。今回出品の優等賞の中ヨークシャー 2 頭を是非英国に輸入したい」との注目すべき発言があった。筆者は英国のロイヤル・ショウや同国各地の共進会で中ヨークシャーの出品豚を度々見ていたが，当時，たしかに原産地の英国のものよりわが国の種豚のほうが量，質ともにすぐれていると思っていたが，奇しくもバーリング氏が「中ヨークシャーを日本から買い戻したい」との発言はわが国の中ヨークシャーが世界第一であることを裏付けしたもので正に感慨無量のものがあった。もしこれが実現していたら，現在どのようなことになっていたであろうか，わが国における中ヨークシャーの現状から見て心中まことに複雑なものがある。序でながら筆者はバークシャーについても，わが国鹿児島県の英国系バークシャーの量と資質はおそらく世界第一で貴重なものであると思っている。

2）第 8 回共進会（静岡県御殿場市滝ヶ原高原）には，アメリカ，カナダ，西ドイツ，デンマーク，オランダ，ブラジル，台湾，香港など諸外国からの視察国を迎えて，きわめて盛大に開催された。

視察の合間に感想をきいてみると「日本の種豚はすばらしい。改良が進んでいる。レベルも高い。管理技術も優秀だ。」とお世辞抜きに賞賛していた。また，「出品豚の資格に能力を加味していること，スキャナーなどの応用による科学的審査は大変よいことだ。」と言っていた。なお，日本のシンボルであり，外国にも有名な富士山麓で行われたことも印象的だったようだ。

あとがき

以上，第 1 回（昭和 27 年，1952 年）から第 10 回（昭和 59 年，1984 年）までの全日本豚共進会を回顧しその概要を記述してきたが，この間（32 年間）のわが国の養豚はあたかも成長発展期にあたり，養豚関係者の豚改良に対する意欲も旺盛で，出品豚も回を重ねる毎に立派なものが出品され，共進会の目的は十分に達成されたと思われる。そして第 4 回まではＹ種，Ｂ種の中型種のみであったが，第 5 回以降は輸入増殖された大型種（Ｌ種，Ｗ種，Ｈ種，Ｄ種）が登場し多彩な共進会となった。

出品豚の資質についても，外国人参観者が驚くほどの充実振りであり，共進会の規模，運営も立派で欧米に劣らぬものであった。

筆者はこの有意義な全日本豚共進会10回の審査に連続してたずさわる幸運に恵まれ，私の生涯にとって真に技術者冥利に尽きたものと心から感謝している。

従来，家畜の共進会がややもすると単なる美人コンテスト的なものであると誤解されたり，関係者だけが結果（勝敗）に夢中になっているが，一般参観者にはさほど興味がないなどの批判が一部にあった。共進会の専門的意義は別として，これらの批評を改善して一般大衆により親しみのある共進会にするためにはさらに工夫をこらす必要があろう。例えば，従来の附帯行事のほか，畜産農家の丹精こめた立派な家畜を1人でも多くの人に見てもらうこと，家畜についてのやさしい解説，人と家畜とのふれ合い，愛畜心の涵養，畜産に関する展示普及，畜産物の消費宣伝の企画等々で，アメリカにおけるステート・フェアなどはよい参考となろう。

第11回の全日本豚共進会は宮崎県で開催に内定していたが，オーエスキー病の発生等の理由により中止となったことはまことに残念である。いずれ時機到来して，本共進会再開の日が来ることを心から期待する。

主 な 参 考 資 料

1）佐々木清綱：第1回全日本豚共進会の概況と受賞豚の体型，畜産の研究　6巻，5号，昭和27年5月（1952）

2）佐々木清綱：第2回同上，畜産の研究　8巻，6号，昭和29年6月（1954）

3）佐々木清綱：第3回同上，畜産の研究　11巻，5号，昭和32年5月（1957）

4）丹羽太左衛門：第5回全日本豚共進会の概況，畜産の研究　19巻，2号，昭和40年2月（1965）

5）正田陽一：全日本豚共進会出品豚の体型について，畜産の研究　19巻，11号，昭和40年11月（1965）

6）丹羽太左衛門：第7回全日本豚共進会の概況（1）（2），畜産の研究　26巻，9号，10号，昭和47年9，10月（1972）

7）丹羽太左衛門：第8回同上，畜産の研究　31巻，1号，昭和52年1月（1977）

8）丹羽太左衛門：第10回同上，畜産の研究　39巻，4号，昭和60年4月（1985）

9）丹羽太左衛門：全日本豚共進会10回の回顧（1）（2）（3）（4）（5），畜産の研究　48巻11号，12号（1994），49巻1号，2号，3号（1995）

10）丹羽太左衛門：豚をたずねてヨーロッパの旅（1)～(10)，養豚便り（現「日本の養豚」）9巻2号～7号，10号～12号（1959），10巻1号（1960）

11）丹羽太左衛門：欧州の養豚事情〔2〕畜産の研究　14巻2号（1960）

12）(社)日本種豚登録協会：第1回（昭和27年），第2回（昭和29年），第3回（昭和32年），第4回（昭和36年），第5回（昭和39年），第6回種豚（昭和43年），第6回肉豚（昭和45年），第7回（昭和47年），第8回（昭和51年），第9回（昭和55年），第10回（昭和59年）全日本豚共進会事務報告書，出品目録，授賞目録，アルバム